

戦後日本の文学空間における「アメリカ」：占領から文化冷戦の時代へ

その他のタイトル	"America" in the Post-war Literary Scene in Japan : From the Period of American Occupation to the Age of the Cultural Cold War
著者	金 志映
学位授与年月日	2016-03-07
URL	http://doi.org/10.15083/00073194

論文の内容の要旨

論文題目 戦後日本の文学空間における「アメリカ」
 — 占領から文化冷戦の時代へ —

氏名 金 志映

米国立公文書館（N A R A）の関連文書が急速に公開されるに伴って近年活気を帯びている冷戦史研究は、冷戦期においてアメリカが、国家イメージの向上および親米世論の形成を目的として、さまざまな文化外交や宣伝活動を世界規模で活発に行ったことを明らかにしている。アメリカの戦後対日政策はこうした動きと足並みを揃えており、占領終結時には、GHQの民間情報教育局及び陸軍省から国務省へ、情報・教育政策の引継ぎが行われた。占領の終結は、冷戦の時代の幕開けでもあったのである。このような認識から本論文では、文学の領域における文化冷戦の事例として、ロックフェラー財団（The Rockefeller Foundation）が日本の文学者に対して行った留学支援を取り上げて考察する。アメリカの文化冷戦は、政府諸機関と多くの民間組織の協力によって担われていたが、その一つの代表例とされるロックフェラー財団は、アジア諸国において広く文化事業を展開していた。そして五〇年代を通して民間組織として日米文化交流を先導した同財団は、多彩な活動の一環として、講和直後の五三年に日本の文学者を対象として一年間の留学を支援する創作フェローシップ（Creative Fellowship）を立ち上げた。およそ十年の間に、福田恆存、大岡昇平、石井桃子、阿川弘之、中村光夫、小島信夫、庄野潤三、有吉佐和子、安岡章太郎、江藤淳といった戦後を代表する文学者たちがこのプログラムの招聘を受けて

アメリカへ渡った。ロ財団の文学者留学制度は、冷戦秩序構築の只中にあった占領後期からポスト占領期への移行期に、本土日本におけるアメリカの対日政策の重心が軍事から経済・文化の領域へと移るなか、文学の領域が、俄かに文化冷戦の場として浮上したことを鮮明に映し出す事例である。

本論文は、このロックフェラー留学を通して文化冷戦の場に身を置いた作家たちの作品を取り上げて考察することにより、占領期から冷戦期にかけての文化領域をめぐる政治的な磁場のなかで、戦後文学における「アメリカ」の表象がどのように形作られていったのかを明らかにすることを目的とする。論文では、主に以下に挙げる三つの相において考察を試みた。第一に、占領期から講和後の文化冷戦期にかけて、アメリカが日本の文化や文学にどのように介入したかである。第二には、アメリカによる文化攻勢が働くなかで、文学者たちがどのように「アメリカ」を経験し、「アメリカ」への態度を形成していったかである。第三には、「アメリカ」表象史としてみたときに、戦後の文学作品のなかのアメリカ・イメージがどのように表れ、変化したかを明らかにすることである。

占領期に焦点を当てる第一部の第一章では、敗戦後に「文化国家」を新たな国家アイデンティティに据えて再出発した日本において、アメリカが日本の文化／文学の創出にどのように介入したのかを明らかにする。占領政策の一つの特徴は、日本人の再方向付けと民主主義化という占領の目的を円滑に遂行するために、「文化」のもつ力が重視されたことにある。そのために、民間情報教育局（CIE）による多岐にわたる情報・教育政策が施行された。CIE映画が大量に製作され、メディアを通じた大規模な宣伝活動が活発に行なわれる一方で、留学制度を通して人的交流が行われ、後にフルブライトなど冷戦期の留学制度の前身として機能した。第四節では、GHQの検閲に焦点をあて、敗戦直後から一九四九年十月まで民間検閲局（CCD）によって施行された検閲の特徴とそれが当時の言説に及ぼした影響を考察した。

これに対して第二章においては、占領期から占領直後までの文学作品におけるアメリカの表象に目を向ける。この時期を代表する作品として、後にロックフェラー財団創作フェローとなる大岡昇平、阿川弘之、小島信夫をそれぞれ取り上げて、GHQの検閲の影響にも注意を払いながら、戦争や占領の体験がどのように描かれているのかを考察する。第一節で取り上げる大岡昇平の『俘虜記』は、戦前の俘虜収容所の情景を「監禁状態」にある占領下日本のアレゴリーとして描くことを試みている。同作品は検閲によって一部が削除処分を受けているほか、さらに作者の自主規制の痕跡を確認できる。その一方で大岡は、

アレゴリーの手法に依拠して検閲網をくぐりながらアメリカの統制に対する批判を示している。終戦とともに広島に復員した阿川弘之は、「年年歳歳」、「霊三題」、「八月六日」、『春の城』などの初期作品において、原爆を繰り返し作品化した。このうち「年年歳歳」は作品の一部が削除処分を受けている。検閲下で書かれた初期の三作品では「アメリカ」が不在だが、検閲が終結した後に発表された『魔の遺産』で阿川は、原爆を投下した「アメリカ」と正面から対峙している。二人の文学者の事例からは、「アメリカ」をめぐる表現への拘束とこれとの格闘が看取される。第三節では、占領が終結した後に書かれた小島信夫の芥川賞受賞作「アメリカン・スクール」を取り上げて考察した。同作品で小島は、被占領者に共有された集団的体験としての恥辱を描きながらも、多様な被占領者の群像を通して占領体験を描いた。

続く第二部第三節では、占領からポスト講和期へのアメリカの対日文化政策の移行を辿り、講和以後に活発化した日米文化交流に眼を向ける。講和後も日本を親米的な民主主義国に留めておくことを目論見たアメリカは、この時期に日本において大規模な文化交流計画を始動させ、日米文化関係の強化を図った。第三章においては、講和使節団に文化顧問として随行したロックフェラー三世が講和以後の日米文化関係の構想を纏めた報告書を取り上げてその内容を検討し、その後政府と民間によって実現した多岐にわたる日米文化交流を概観した。これにより、冷戦下にあったポスト講和期の日米文化交流に内在した政治的な磁場が明らかになった。また、この時代にアメリカは、U S I S映画やラジオ放送などを通してアメリカに関する好ましいイメージを日本に向けて積極的に発信していた。冷戦期のアメリカによる情報・宣伝政策を視点としたときに強く浮び上るのは、自らを表象する「アメリカ」である。

第四章では、文学の領域における文化冷戦に眼を向ける。講和後の日米文化交流には文学者たちも多く身を置いていた。そのなかでも突出して多くの文学者をアメリカへと送り出したのが、ロックフェラー財団創作フェローシップである。本研究では、ロックフェラー財団文書館（The Rockefeller Archive Center）資料に基づいて、これがいかなるプログラムであったのかを実証的に解明した。考察の結果明らかになった点は、以下の通りである。第一には、冷戦下で行われた多くの文化交流事業と共通して、同プログラムには、構想から運営に至るまで、政治的な思惑と相互的な文化交流の理想が複雑に絡みあっていた。第二に、同留学プログラムは日本側の要請をも踏まえて立案されたもので、日米が共同で運営に関わり、坂西志保が推薦人を務めるなど、留学制度をめぐるのは日米双方の力

が働いていた。さらにこの助成プログラムをめぐる日米双方の期待や思惑を検証するならば、創作フェローシップは、日米の反共リベラルが手を結んで親米反共の路線に基づく日本の近代化推進を目指す企図が、文学への介入として顕われたものと言える。これらの点に加えて、財団側の柔軟な方針により、各々の文学者の留学の体験が多様なものとなったことは、創作フェローシップの重要な特徴である。総じていえば、日財団留学制度の成立に冷戦体制の政治的な要請が強く働いていたことは疑いえないとしても、実際の留学は、冷戦の政治性にのみ収斂しないものとなったといえる。

こうした考察を踏まえて最後に第三部を構成する第五章、第六章、第七章では、阿川弘之、小島信夫、有吉佐和子の三人の創作フェローの留学体験と、帰国後に「アメリカ」を題材として書かれた代表的作品を順に取り上げて考察した。各々の文学者は、各自の関心に基づいて多様なアメリカの体験をし、それをもとに作品のなかでそれぞれに異なる「アメリカ」を描いた。日系人をテーマにした阿川弘之の『カリフォルニア』、中西部での農家滞在の体験をもとにアメリカン・ライフを描いた小島信夫の『異郷の道化師』、黒人と結婚した〈戦争花嫁〉の視点から過去の占領を語り直し、人種差別の構造に肉迫した有吉佐和子の『非色』など、フェローらの留学体験とその影響はその様相を大きく異にしている。

以上の考察を踏まえ、創作フェローシップを視座としたときに、ポスト講和期の文学空間はどのように浮かび上がるのか。文学者たちを招いてアメリカの文化を深く体験させた創作フェローシップは、アメリカによる冷戦下の文化的攻勢がポスト講和期の文学空間に奥深く入り込んでいたことを示すものである。従来、戦後の日本の文学領域へのアメリカの介入は専ら占領期の検閲を焦点として論じられてきたが、このように講和以後にもアメリカが引き続き文化の交流を通じて日本の文学者に強く働きかけたことは、特に戦後のアメリカをめぐる文学言説を考える上で示唆するところが大きい。GHQによる検閲が文学表現の規制を通した上から下への「指導」であったのに対して、日財団の交流プログラムは日本側の要望に寄り添い、できる限りフェローたちの自由を尊重しながら交流を支援することで、文学者たちにアメリカとの親密な友好関係の形成を促したことに特徴があった。即ち、ポスト講和期の日米文化交流の事例に即せば、占領から文化冷戦の時代への移行は、「禁止するアメリカ」から、自らの表象に介在し、寛大さや親密さで包摂する「アメリカ」への変容として表れるといえる。とはいえ、フェローらの作品に描かれた「アメリカ」は、多様性と両義性を孕んでいる。本論文を通して浮かび上がるのは、「アメリカ」の表象をめぐる日米間のせめぎ合いの諸相である。